

【博士論文要旨】

ソーシャル・キャピタルの役割と効果からみた地方都市の持続可能性に関する研究

近藤 紀章

本論文は、ソーシャル・キャピタル（Social Capital,以下 SC）の役割と効果に着目し、都市構造と地域コミュニティの両面から持続可能性を評価することによって、地方都市の持続可能性を考察したものである。具体的には、SCの蓄積という観点から、個人の居住意向と社会参加をふまえて、持続可能性の指標構築をおこない、コンパクトシティ政策との対応状況を考察する。そのうえで、SCの新たな形成と醸成という観点から、コミュニティの担い手の新たな解釈とその社会参加の方法について、考察したものである。本論文は、序章、結章を含む6章から構成される。

序章では、研究の背景、目的、研究の位置づけを論じている。Putnamの定義にもとづいて、SCを地域や都市に関わる持続可能性の社会的要素として位置づけ、定量的に計測、評価するための指標として分析に用いるという、本研究の視点と特色を示している。

第1章では、広域（大阪、京都、滋賀）でのオンライン・アンケート調査の結果をふまえて、都市構造の持続可能性を居住意向の規定要因と社会参加の与える影響要因から分析した。「わからない・決めていない（保留・不明）」には、転居意向と同じく、居住継続意向とは逆の性向を持つ個人の裁量があることを、モデル化によって明らかにした。

次に、居住地選択のモデル構築によって、居住意向と転居意向をふまえた持続可能性の指標を構築した。居住意向では、主観指標と地域特性をふまえた客観指標からなる分析指標を抽出している。地域特性のうち、雇用指数や医療指数は都市化を示す指標であるもの、経済指標は誤差に近い効果であった。雇用水準や医療状況の高い地域は転居意向が高い傾向にある。すなわち、人口の流動性が高い都市部であり、雇用指数や医療指数は都市化を示す指標であることを示している。

社会参加が都市構造の持続可能性に与える影響から、ブリッジング型 SC に属する活動のなかでも、特に、主体的に活動に関わりやすいサークル活動（自己実現型活動）において、地域とのつながりや結束といったボンディング型 SC の役割を果たしていることが明らかになった。転居意向のある人に対して、ブリッジング型 SC のうち自己実現活動への参加は、転居を防ぐ要因につながることを指摘した。

第2章では、滋賀県野洲市を対象とした市民意向調査をもとに、因子分析とクラスター

分析を用いて地域特性を把握し、設定された居住誘導区域との比較を通じて、コンパクトシティ政策の受容性について考察している。その結果、コミュニティ未形成型の地域では、住宅化の傾向があり、市街化の拡大を抑制する施策が必要不可欠である。コンパクトシティの形成という政策の枠組みでは、隣接する都市空間型の地域への都市機能集積によるスピルオーバー効果を抑制することが重要である。しかしながら、地方都市の持続可能性という観点から見ると、すでに人口が集積している都市空間型の地域に居住や人口を集約する都市構造の再編よりも、都市コミュニティの特性であるブリッジング型 SC を醸成する地域コミュニティの再構築に取り組むことが必要である。つまり、都市化の抑制と今、暮らしている人々のつながりを構築することが優先されるべき課題であることを指摘した。

第3章では、滋賀県野洲市を対象とした住民意向調査をふまえて、住民の生活環境に対する評価と地域活動への参加意識に対する意識構造を明らかにした。そのうえで、ペットの飼い主に着目し、新しい地域コミュニティの担い手のあり方と活動の可能性について考察している。これまで地域コミュニティや地域活動との関わりという文脈では語られてこなかったペットの飼い主の社会参加の可能性を示唆したことは、本研究の成果である。限定的な効果と可能性の枠組みという課題は残るものの、野洲市の都市コミュニティではブリッジング型 SC の醸成が喫緊の課題であり、政策的なインプリケーションとしては有効であることを示している。また、生活環境および社会参加に対する意識構造のモデル化から、地域をより良くしたいと思うポジティブな意識と、地域の課題を認識するネガティブな意識の両面が作用していることを明らかにした。

第4章では、文化的景観という地域特性を生かした現場の体験と対話の反復を通じたアジャイル型 WS をプログラムとして構築し、新たな担い手の社会参加を支援する手法の可能性について考察している。この結果、文化的景観という地域特性を生かした現場の体験と対話の反復を通じた WS プログラムを構築できた。地域の風土や本質を把握するために、地域の住民とそうでない人が、地域の風景や現場での体験を共有しながら、対話を重ねる新しい交流様式としての有効性を指摘している。

結章では、各章で得られた成果と結論をまとめ、課題と今後の展望をのべている。